
- 精霊装甲 光牙 -

高浜ゆりえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- 精霊装甲 光牙 -

【Nコード】

N9312A

【作者名】

高浜ゆりえ

【あらすじ】

大自然の力を借りて、光輝く戦士が燦上する。その名は光牙……
……今、再び闇から出現する凶怪と、光使である人間達との相剋の歴史が始まる。燦直せよ！光牙！

巻之零 走る、二人。（前書き）

水が流れる。

空は青く広い。

そして光が大地を満たし、緑が生い茂る。
野生の生命が、静かに生きる。

そんな所から、物語は始まる。

巻之零 走る、二人。

― 群馬県 榛名山中 ―

走り屋の名所である榛名山中の公道の横の谷間。

その川岸で、二つの人影が走る。

「来い花澄、こっちだ！」

真昼の日差しが、木々の間から差し込む。

川岸の岩を足場に、ワイシャツと長ズボンを纏った、手ぶらの青年は走った。

青年の名は、神代 飛鳥。かみしろ・あすか

彼は光の使役、光使の一員である。

「先輩が…こんなに光使の仕事を頑張ってるなんて…おかしい絶対におかしいです！」

その後を必死に追いかける少年は茶色のズボンを躍動させ、白く細い足で岩場を走った。

背中には布製のバックを2つ背負っており、とてつもなく重そうである。

「…今まで ろくすっぽ（光の儀）にも参加しなかった先輩がなんで今日はそんなにやる気なんですか?！」

必死に走る少年の顔つきは、まるで少女と見紛うほど端正で白かった。

彼の名は紫陽しやう 花澄かすみ。

彼も光使の一員であり、神代のサポート役である。

「光の儀に参加しないのは同じ時間にバイトがあるからだ…今日はそんなんじゃないねえ！」

神代は大型テレビくらいの大ささの岩の上で立ち止まり、灰色のワイシャツ越しに自らの胸に手を当てた。

「ざわつくんだ 胸の奥が」

脈を打つ心臓が、何かに反応しているかのように躍動する。

「……………」

花澄は口を閉ざして立ち止まると、布製の帽子を頭から外し、神代の胸元を訝しげな表情で見つめた。

「それは……………ただの動悸じゃないんですか？」

真面目な顔つきで言い放つ花澄。

「…それも 嫌だなあ」

妙に合点のいった神代は眉間にしわを寄せ、頭を掻きながら再び走り出した。

（……………出来れば……………どちらとも違うといいな……………）

神代は腕時計を見つめた、午後二時を回っていた。

二人の行く手に立ち並ぶ木々の幹の下で、手のひらくらいの大ささの蛙が低い声で鳴いた。

巻之零 走る、二人。(後書き)

この作品はフィクションです、実際の人物・団体とは全く関係ありません。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

卷之一 光牙、燦上。
(前書き)

卷之一 光牙、燦上。

1部 | 光使 |

巻之一 光牙、燦上。

…二千年前、闇の力を使う闇の一族である凶怪きようかいを、大自然の神秘の力で封印した集団があつた。

彼らの名は光使こうし。

そして、時は現代。

凶怪が再び蔓延る予兆を見せる日本に、光使の意志は蘇つた。
現代の光使とは、日本の防衛組織から凶怪への対処を委託された民間の組織である。

光使に所属している人々の使命は、様々な武具を用いて凶怪となりうる驚異を排除するという危険なものであつた。

「先輩、一時間も探索して … 光翠石が全然反応しないんですけど？」

飛鳥に追いついて横に並ぶと、花澄は胸に煌めく六角形の結晶のペンダントを見せた。

「… んあ？」

飛鳥は黒い光沢を放つ結晶を見つめて、足を止めた。

「ほら、光りませんよ？」

それは光翠石こうすいせきといい、凶怪や危険を察知して赤く光る、光使の道具であつた。

「んなもん、アテになるかよ」

飛鳥はきびすを返して歩き出した。

飛鳥は、光使の一員ではあったが光翠石を携帯していない珍しい男である。

「大体、凶怪は千年の間出てこなかったわけだろ？なら、なんでそんな石ころで凶怪が出て来るのが分かるんだ？」

飛鳥は訝しげな表情で花澄の光翠石を指でつついた。

「そっ…そりゃ…そうですね！先輩の動悸が頼りなんて…」

(…針の無いコンパスくらい当てにならないじゃないですか！)

失礼な言葉が喉で止まり、思考に留まる。

花澄の頬に、一筋の冷や汗が流れた。

「大丈夫だって！それを証拠に ほら、あれ見ろ！」

飛鳥の指差した川の浅瀬には、人間の頭くらいのサイズをもつ、毒々しい斑模様の蛙が座っていた。

『ゲゴリッ！』

蛙は赤い目を細めて喉を鳴らし、その細長い足で跳躍した。

小動物ながら、飛鳥達を威嚇をしているのである。

「あ、本当だ……あれは マダラ大ガエル！」

瞳を大きく見開きながら、花澄はバツクを地面に下ろした。

マダラ大ガエルとは、凶怪の闇の力の支配下に置かれた蛙のことである。

「花澄、錫杖だ！」

「はい！」

亜・ウンの呼吸で花澄がバツクから取り出した短い鉄製の錫杖を受け取る飛鳥。

「…つと！」

錫杖の杖は高枝切りハサミのように伸び、飛鳥は自分の身の丈ほどある錫杖を振り上げて走り出した。

「はあッ！」

思い切り振り下ろされた錫杖は、マダラ大ガエルの脳天を正確に中央からかち割った。

中身の臓器が飛び散り、飛散する。

「いつもながらお見事です、先輩」

パチパチと小さく拍手する花澄。

マダラ大ガエルの原型は、殆ど残らなかった。

「よし、写真撮つとけ花澄 俺は（おきりこみ）を用意する」

飛鳥は錫杖を短く縮小させバックにしまうと、その中からデジカメを取り花澄に渡した。

「おきりこみですか！やった！」

デジカメを受け取った花澄はまるで子供のように跳ねた。

「……………と、写真撮らなきゃ……………」

花澄はふつと我に帰り、砕け散ったマダラ大ガエルの死骸の写真を撮影し始めた。

そして飛鳥は（おきりこみ）の用意を始めた…

巻之一 光牙、燦上。（後書き）

この物語はフィクションです、実際の人物・団体とは関係ありません。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

第二部 迫る、闇（前書き）

第二部 迫る、闇

第二部 迫る、闇

花澄は粉々になったマダラ大ガエルを写真に撮っていた。

「慣れれば…平気になるもんだなあ」

この行為は彼の趣味では無く、彼の仕事であつた。

通常、光使は凶怪探索の際には直接的に危険を排除する係とサポートをする係に別れており、サポート係の花澄は写真撮影をしている。

「……………」

写真に撮らないと、光使は危険手当を手に入れることができないからである。

「…このサイズだから大丈夫だけど…これ以上大きいやつが出て来たら」

彼は仕事のために、仕方なくマダラ大ガエルの死骸をカメラに収めているのだ。

「…先輩…逃げてくれるかなあ…」

因みに、殆ど戦闘能力の無いマダラ大ガエル一匹の危険手当では、一律3000円である。

「オワタ…」オワタ…」撮影…オワタ…」

撮影を終わらせた花澄はデジカメをバックに入れ、そのまま包丁を取り出した。

「先…輩…！終わりましたよ…！」

別に飛鳥を刺すわけではない、これから料理をするのだ。

「よし！ならこつち手伝ってくれ！」

「了解です！」

飛鳥に呼ばれ、花澄はにこやかに笑いながら包丁を振り上げながら

走った。

危ない、危ない。

「……」

飛鳥はまな板と鍋を砂利の上に置き、まな板の上で麺をこねていた。おきりこみとは埼玉・群馬県の郷土料理で、太く切った幅広の麺を味噌のベースの汁で煮込んだ料理である。

「花澄、ネギ切ってくれ」

飛鳥は薪の上の鍋に太く切った麺を放り込んだ。

「ハイ」

花澄は快活な声で、まな板の上の葱（下仁田産）を刻んだ。まるで料理マンガのように、葱を刻む花澄の手が残像を描く。

「よし、一気に終わらせて食おうぜ」

葱、野菜、麺、etc…様々な食材が、鍋の中の味噌の濃い汁に放り込まれる。

沸き立つ汁、灰汁を取る飛鳥。

この後は煮込むだけなので、省略。

「……うーん 美味しい」

料理を終えた二人は比較的大きな岩に腰掛けて、お椀の中のおきりこみを食べている。

周囲はすっかり暗くなっていた。

花澄が用意しておいたラジカセほどのサイズのライトは、二人の行動範囲を照らしていたので問題は無いのだが。

「あの 先輩…辛くないんですか？」

花澄は眉を潜めながら隣でおきりこみを頬張る飛鳥に質問した。二人の間には、人一人分のスペースがあった。

「ん？」

飛鳥おきりこみを喉に流して、不思議な顔をした。
手で持っているお椀の中のおきりこみは、赤かった。
七味唐辛子である。

「全然、なんでだ？」

平然と答える飛鳥、彼は根っからの辛党であつた。

「…なんででしょうね…」

ため息を漏らしながら再び視線を手元に戻しておきりこみを食べようとしたが、

「んあ？」

花澄の口から間抜けな声が出た。

手元にあるはずのお椀が無いのだ。

「どうしたよ？花澄」

焦る花澄を察した飛鳥は首を傾げて横を見つめた。

「…うん…！？…どこだろう？！」

花澄は、あたふたしていた。

「先輩、おきりこみが消えた…」

悲しそうな顔をして飛鳥を見つめる花澄。
なに言ってるんだこいつは？

と言つような表情の飛鳥。

「…まっ…まあ…なくなつたもんはまたよそればいいだろ？ 気にすんな気にすんな！」

一応、これ以上凹まれると機嫌の直りが悪くなるのでフォローする飛鳥。

「ドンマイケル！」

一世代前の、古いギャグ。

彼らの生まれる前に流行ったものである。

「……………」

全く笑わない花澄。

二人の間を微妙な空気が流れた。

「…はあ…まあ…いいです またよそつてきまあす」

気を取り直して、鍋へと歩いていく花澄。

やはりまだ凹んでいる。

（…何かが変だ…まさか…凶怪？）

花澄は、周囲を見渡した。

ライトの光を覆い尽くすように、闇が深くなっている。

飛鳥は物産展で買ったメンチカツを頬張っていた。

「……………ん?!」

花澄は、自分の胸元の光翠石が光り輝いているのに気づいた。

それは、花澄が今までに見たことの無いような、赤くおどろおどろしい光であった。

「……………せつ 先輩！これはッ!？」

次の瞬間、花澄の背後に闇が迫った。

無数に絡みつく、蜘蛛の糸。

第二部 迫る闇（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第三部 糸引く、凶怪 (前書き)

一之巻

第三部

― 糸引く、凶怪 ―

第三部 糸引く、凶怪

「せつ先輩ッ!!」

蜘蛛の糸は重なり合い、太さを増して白い光沢を放った。

「ぐっ!くっ 苦しいッ!」

うどんのような太さをもったそれは花澄の体の自由を奪い、流れ行く冷たく深い川へと引きずった。

「なっ?!なんだあっ?!」

花澄の叫びに気づいた飛鳥はお椀を投げて、飛び出した。

「ぐっ!…せ…ああッ!」

糸に体をくるまれた花澄は既にライトの光がよく届かない川の近くにまで引きずられていた。

「待つてろ花澄!今行く!」

『…タエマカツ・ンゲンニグ!』

飛鳥の声を聞き取ったかのように、川の中から低く淀んだ叫び声が響く。

『グ…ググ!ギギ!』

人間のものと動物のものとも違う、不気味な声が谷間に響く。

「誰だっ?!英語なんか喋ってんじゃねえッ!」

もちろんそれは英語などでは無かった。

『許さねえ!』

飛鳥は鍋の横のバックから錫杖を取り出し、怒り心頭といった表情で飛び出した。

「せつ！　先　先輩ッ！ごぼッ！　ああッ！」

花澄の頭が水へと浸かっていく。

視界がぼやけ、彼の脳裏を恐怖と混沌が支配した。

「でえええええいッ！」

唸り声が響く。

飛鳥は手に持った錫杖を振り上げ、水中から伸びる糸を睨みつけた。
「ふんッ！」

振り下ろされた錫杖は薄暗い闇の中を抜け、川の中から伸びていた糸を引き裂いた。

水が跳ね、月の光が揺れ動く水面で反射する。

「切れた！…　大丈夫か！花澄ッ！」

飛鳥は錫杖を川岸に突き刺し、比較的筋肉質な両腕で、頭が水に浸かっている花澄を抱き上げた。

『……ハトバルキ・ヲトイノレオ　ギギ・アデム……』

（それ）は水中の中で不気味な声で呟き、赤い瞳を光らせた。

「先輩ッ！げほっ！気をッ　つけて下さい！奴は　水の中にいます
！」

飛鳥は蜘蛛の糸にくるまれた花澄を抱えながら、水場から離れて走り出した。

「みつ！見りやわかる！逃げるぞ！」

その格好は俗に言う（お姫様抱っこ）であり、街中であつたら完全にそちら系の人である。

もつとも、その光景を見ていたのは木の枝に掴まっていた一匹の小さな小猿だけだったが。

「くっ！まさか…あの糸が…ざわめきの元か　！」

脱兎の如く走る飛鳥。

胸が再びざわめく。

(…いや…違う 俺のざわめきは何かが違った…なにが…なんなんだ！)

飛鳥は水の中で蜘蛛の糸を出した何かざわめきでは無いと直感した。

「先輩ッ！まさか あれが……本当の！」

恐怖に引きつった顔で花澄が飛鳥を見つめた。

「……だろっ！くそっ！」

飛鳥は、先ほど座っていた石に身動きのとれない花澄を下ろし、近くのバツクの中から耳搔きくらの刃渡りのナイフを取り出した。

「くっ…なかなか…切れねえッ！」

花澄の体にまわりつく蜘蛛の糸をナイフで引き裂く飛鳥。

「くっ！なにが光使特製だよ！」

光使が作った特製の刃はボロボロになりながらも何層にも重なった糸を切断した。

「先頭は頼んだぞ花澄！ライト持てるか？！」

飛鳥は花澄の腕を引いて立ち上がらせ、肩を叩いて正気を保たせた。

「はっ！はい！」

ライトを持ち上げて走り出した花澄。

それを後目に飛鳥はバツクから独鈷（密教の法具であり、鉄アレイのような大きさを両端に銚のような突起がある）を取り出した。

「俺は 後方を守る！」

飛鳥は血豆が潰れた拳で、独鈷を握りしめた。

(…こいつが効いてくれる奴なら…いいんだがな！)

飛鳥は意を決したかのように独鈷を握りしめ、花澄の後を追い走り出した。

その光景を見ていたとでも言うのだろうか。

川の中から赤い2つの光が煌めく。

『……………！』

不気味な声と共に水が跳ね上がる音が響く。

『カス…ガニ！ ギギ！！』

浅瀬の水を引きずる重い足音を聞き取った飛鳥は思わず息をのんだ。迫ってきている…蜘蛛の糸を吐く（何か）が…

「花澄！ 追ってきやがった！ もっと もっと早く走れ！」

「はっ はいッ！」

バックを背負い飛鳥は必死に叫ぶ。

その叫びを聞き、花澄は焦りながらも死ぬ気で走った。

「くっ…僕はっ！ 死にたくないっ！」

うめき声のような声をあげる花澄。

先程の糸の感触がまだ体中に残っており、酷く気持ちが悪かった。

「僕はっ…！ はあっ はっ…！」 息が切れそうだったが、恐怖に支配されていた彼の感覚は完全に麻痺しており、それなりに速く走っていた。

「はっ…！ はっ…くっ！」

走った。

ライトの明かりを頼りに、草木をかき分け、川に沿って走った。

県道まで出れば、車がある。

車に乗れば、なんとかなるかもしれない。

「くっ…！ ひっ…はっ！」

花澄は恐怖に支配された五感を頼りに、必死に走った。

だからであろうか、彼は後ろを見なかった。

背後にいるはずの、飛鳥は既にいなかった。

「…はっ…ひぁ…はぁ…！」

彼がそれに気づいたのは、数分後のことであった。

…馬鹿なことをしたとは…思っていなかった

だから人から馬鹿と呼ばれてしまうのだろうか。

「浅瀬を走る足音でお前の足の速さが分かった…」

飛鳥は独鈷を握りしめ、バックを背負い、先ほどの場所に立っていた。

「多分、普通に逃げたんじゃ俺達…人間は追いつかれちゃう」

熱されていた鍋はどかされ、薪の炎は更に燃え上がる。

『ギギ…！！カタメラキア・ギ！！』

その炎は灰になる前の、最後の輝きであった。

「足止めになりや…いいんだがなあッ！」

独鈷を右手に、飛鳥は走り出した。

第三部 系引く、凶怪（後書き）

この物語はフィクションです、実在の人物・団体とは全く関係ありません。

ご意見・ご感想を、熱烈にお待ちしております。

あとがき（まだ一話も終わってないのに…）

平成仮面ライダーなどを手がけている井上さんの脚本を手本に、お話を区切ってみました。

これからも【光牙】をよろしく願います。

第四部 漢と、大猿（前書き）

卷之一 光牙、燦上

第四部 漢と、大猿

第四部 漢と、大猿

「……足止めになりや……いいんだがな！」

飛鳥は、淀む闇を見つめた。

不気味なほどに静かであった、木々が風に揺られる音が響くだけである。

『……』

闇の中から赤く光る瞳がゆらりと軌跡を描いて迫る。

「やるなら一気にやってやる！」

飛鳥は、その光に向かって走り出した。

風が吹き荒び、木々がざわめく。

『……ヲエマオ・スロコ！ギギ！』

闇と光が交わりあう場所で、迫る影の胸元に飛び込み、独^ト鉆^ツを突き刺す飛鳥。

「でええええりゃッ！！」

独鉆の鋭い先端が、その影の左胸に刺さった。

「やったか……?!」

肉にめり込む感触が、飛鳥の手に伝わる。

強いて言うなら、固い粘土のようであった。

『ググッ！！……ガダ……イナ・ハクタイ！……ギギ！！』

闇からの使者……凶怪の不気味な声は、どこか余裕に満ちていた。

「くっ！……効かねえか！」

凶怪の肉にめり込んだ独鉆は抜けず、飛鳥は手放して後ずさりした。

「……お前が……本当の……凶怪……！」

飛鳥は瞳を見開いた。

薪が激しく燃え、凶怪の全身が炎に照らされた。

『ヤシシ ノリカヒ…… コロス !ギギ!』

凶怪は、シルエットだけで言えば人間に近かった。

ただ、その背中からは蜘蛛のような細い八本もの足が覗いていた。

『ニン…… ゲン……!』

そして、その凶怪は黒い蟻の皮膚のような表面をもっており、昼間のマダラ大ガエルに酷似した赤い斑模様が全身に走っていた。

「ばっ！ 化け物めっ！」

胸に突き刺さった独鈷を引き抜く凶怪、そして窪んだ胸はすぐさま再生した。

「でえいッ……！」

舌打ちして、腰の小物入れから取り出した火薬玉を投げつける飛鳥
『ギギ!?!』

花火に酷似した火薬玉は見事に凶怪の顔に当たり、炸裂した。

飛鳥はその爆発音と閃光で攪乱しながら、凶怪の背後の水辺に突き刺した錫杖を取ろうとしたが、甘かった。

『ギガッ……!』

爆発などものともせず、横を通り過ぎようとした飛鳥に鉄拳を打ち込む凶怪。

「ぐッ……!?!」

凶怪の拳は腹にクリーンヒットし、飛鳥はまるで交通安全教室のダミーのように吹っ飛んだ。

「ぐっっ……!ぎいいッ……！」

勢いよいよく転がり、岩に当たって停止する飛鳥。

それは某ダグ〇ムのプロローグのような体勢であった。

「ぐッ……」

吐血し、意識が一瞬途絶える。

「……」

お花畑が見えて、変な語録のあるおばあちゃんは見えないが、死にそうだった。

「花澄……いい彼女作れよ……後は……頼んだぜ……」

が、飛鳥は瞳を開いた。

自らの血が瞳に流れ込む。

「って俺の……バカ野郎……!!」

飛鳥は血が流れる頭に手を添え、Yシャツの胸の部分を破り裂いて頭に巻きつけて視界を確保した。

「まだだ……まだッ!!……俺は……やれる!」

凶怪の赤く光る瞳が、軌跡を描きながら走り去った方向へと走っていく。

凶怪は、飛鳥がもう死んでいると思っていた。

確かにそれほどまでに出血しており、虫の息のような状態ではある

が。

「…馬鹿…やろう…そつちじゃねえ…！」

飛鳥の声も虚しく、血にまみれた視界の中で、赤い眼光は川を下つていった。

「…そつちには…四年間も だらしねえ俺のサポートをしてくれた男がいるんだ…」

飛鳥は背中に背負ったバックから、透明なバックに包まれたアジのフライを取り出した。

これも、物産展で買ったものだった。

「…そつちに行くんじゃ ねえ…！」

血にまみれ、爪の割れた指先で半分に割り、口に入れた。

一瞬、瞳を閉じた。

味など、もう分からなかった。

次の瞬間、飛鳥は岩に体重をかけて立ち上がった。

「うわあああああああッ！！！」

雄叫びとも断末魔ともつかない叫び声をあげながら、飛鳥は走った。

手には何ももっていない。

もう光使の武器では無駄だと、本能が悟ったからだ。

『……メカバ！！…オキガア・ナダム！』

飛鳥の思惑通りに凶怪は動いた。

バッグを投げ出す飛鳥を睨みつけてゆっくりと近づき、嘲笑う凶怪。

「あああああッ！！！」

凶怪を背に走る飛鳥。

花澄の逃げる時間は…これで稼げただろうか…

『ギギ！！ネエエエエエシッ！！！！』

両腕の指先から蜘蛛の糸を放出する凶怪。

『又ン！！』

二つの糸は闇の中で白く輝いて半円を描いて直進し、飛鳥の両腕にまとわりついた。

「あああああッがあっ？！」

体勢を崩され、思い切り後ろに倒れる飛鳥。

「…くっ……あああああッ！！！」

更に叫び声をあげ、足で地面を蹴って抗おうとするが、糸は力強く飛鳥を引っ張った。

『ギギギ………スマキ・ダタイ！！』

凶怪は蟻のような牙を剥き出しにして、六個の丸い瞳で飛鳥を見下ろした。

口の中から唾液が零れ、地面の砂利が蒸発した。

この瞬間の凶怪の頭と、飛鳥の頭の距離は丁度人間の頭一個分であった。

「あああああああッ！！！」

頭から引きずられる飛鳥の叫び声は止まらず、なおも凶怪を睨みつけた。

『ギギ・イサルウ！ガアアアアアッ！』

牙が、唾液が、飛鳥に迫る。

凶怪の不気味な叫びと、飛鳥の猛る声がぶつかり合う、その時だった

『ギイツ？！』

吹き飛んだ。

凶怪が。

「……………」

それは鉄拳だった。

紅く煌めく拳が、風を切って、凶怪を川の方この岩場へと吹き飛ばした。

「……………」

飛鳥は言葉を失った。

鉄拳から放たれた風は刃となり、飛鳥の体に巻きついていった糸をも切っていた。

『ギ…ギ……………グブッ！』

岩場にめり込んだ凶怪は、先ほどは唾液を垂らていた口から大量の赤い血を吐き出した。

（…男よ……………）

低く落ち着いた声が響くが、啞然としていた飛鳥の耳には届かなかった。

「なにが……………起こった…？」

凶怪の動きしか見ていなかった飛鳥は、その鉄拳を放った腕を見つめて驚いた。

(……………)

その腕は巨大で、掌だけでもダンスほどの大きさであった。

「お前は……………」

飛鳥の視線が煌めく紅い腕を辿ると、そこには……巨大な紅い岩……いや、猿がいた。

「ゴリ　ラ……？　いや……猿……？！」

飛鳥はよろよろと立ち上がり、瞳を見開いて二階建ての家のように巨大で、まるで鋼のような光沢を放つ紅い猿を見つめた。

(…我は……精霊……！)

「しゃ！……しゃべる……のか　！？」

やっと言葉を聞き取ることができ、更に驚く飛鳥。

確かにゴリラのような前傾姿勢のまま手で体を支えていたが、大猿であつた。

(…我が名は……赤岩の大猿………)

大猿は口を開き、飛鳥を真つ直ぐに見つめた。

「……赤岩の……大猿………」

飛鳥は啞然としながら反復した。

「……………うそだろ……？」

まるで、夢でも見ているようであつた。

(…我が力を……貴様に託す………！)

大猿は飛鳥を見つめて、両手を握りしめた。

鋼が擦れあふような音が響き、その大猿がただの生き物で無いことを誇示しているようであつた。

「俺に……力を……？」

震えた声、空矢の体力は限界であった。

『ギ……ギギッ……』

(…闇からの使者…… 再び復権のための戦いに挑むのか…)

大猿は、蠢きながら川の向こうの岩場から離れつつある凶怪を一瞥して呟いた。

「使者……？ 復権……？ なんの話だ……？」

途切れ途切れの言葉を放つ空矢。

今の彼には大猿の言葉が理解できなかった。

(…お前は、闇を裂く光の牙となるのだ……!!)

再び大猿が飛鳥を見つめると、その巨大な全身から燦然たる輝きが溢れ出した。

山吹色の光。

山に、朝が来たようであった。

第四部 漢と、大猿（後書き）

このお話はフィクションです、実際の人物・団体とは全く関係ありません。

ご意見、ご感想をお待ちしております。
本当にお待ちしております。

本当の本当にお待ちしております。

本当の本当の本当をお願いします。

本当の本当の本当の本当の（略）ます。

第五部 戦う、漢

「具体的に…… どうすりゃいいんだよ？ 大猿？！」

息も絶え絶えな飛鳥は光り輝く大猿を見つめた。

既に視界がぼやけていたが、不思議とその大猿だけはすっきりと見えていた。

（簡単なことだ）

光り輝く紅の大猿の口元は、少し自信に満ちていたようであった。

（… 我を 纏うのだ！）

次の瞬間、大猿の体は分裂した。

分裂した一つ一つの四肢は空中で停滞し、まるで飾られている鎧のような姿に変質した。

「… お前を… 纏う？」

飛鳥は、分裂し巨大な鎧と化した大猿を指差した。

その瞳には、紅い鎧の放つ光が夜の闇を払うように映っていた。

（… さあ… 我を燦直するのだ！！）

巨大な鎧はその眼前で瞬時に縮小し、今まで以上の光を放ってその体を包み込んだ。

痛みすら忘れて立ち上がる飛鳥。

「…… 燦直！！！」

燦^{さんちよく}直と、思わず飛鳥は叫んだ。その言葉が意味することをまだ知らないが、心の奥から叫んだ。

光が、暗い谷間を包んだ。

『グッ… ノコリカヒギギ… アテム（コウガ）！』

その光景を見つめていた凶怪は自らがめり込んでいた岩を蹴り、8メートルほど跳躍した。

『ギギギッ！ネシ！！』

跳躍の勢いを失った凶怪は一回転し、空中で落下の体勢をとった。

『…！！！！』

凶怪は自らの右手の掌から糸の粘液を分泌させ、粘土のように握りしめた。

粘液は凶怪の背丈ほどはある細長い純白の槍と化した。

『チレケダク！アテム・コウガ！！』

槍を構えながら、まるでプールにダイブするかのように引力に任せて頭から落下する凶怪。

まるで弾道弾のように、飛鳥を中心としているであろう炎の中に突っ込んでいく。

『！！！！』

揺らめく炎と光が四散し、消失した。

『……………』

そこにいたのは、真紅の鎧を全身に装備した飛鳥であった。

「…大猿…これが…（力） か！」

飛鳥は鎧となった大猿に呼びかけた。

その鎧はまるでアモルファス材質でできた光沢のある装甲服のようであった。

(…ああ…これが闇を砕く光の牙！)
ヘルメットのゴーグルらしき部分の奥の鋭い瞳が、黄色く光る。

(……光牙だ!!)

その両肩の装甲には結晶が装備されており、額に埋め込まれた大猿の巨匠が脈動するかのように紅い光を放った。

「光牙… か……なんだかよくわからないが…… 力がみなぎるぜ！」

装甲された腕が、凶怪の握っていた槍を掴む。

「ふんッ！」

紅き装甲の戦士…光牙が槍を万力のように絞め上げると、槍はまるで液体窒素で凍らせたバナナのように崩壊した。

「?!」

凶怪は驚愕しながら崩壊していく槍を手放し、地面に落下した。

「ガググ…ギギッ ?!!」

少しよろけながらも大地を踏みしめる凶怪。

「…………ふんッ！」

光牙は力み、木々を背にして両腕を構えた。

「これまでだ 凶怪！」

対峙する凶怪と光牙。

「……ギ……」

凶怪と光牙は、お互いに一步も引かずに睨み合った。
乾いた風が再び吹きすさぶ。

「ギギギッ！」

先に仕掛けたのは、凶怪の方であった。

その両腕から一直線に糸を放出し、大地を踏みしめた。

(…すげえ！……あの糸が…見える！)

飛鳥は息をのんだ。光牙の瞳は放出された糸の軌道が、まるでスロ―モーションのように見えていた。

「……………そこか?!」

身を翻して糸を避ける光牙。

「……………!」

そして、通過していく糸を、両手で掴んだ。

「うおりゃあああああああああいつ!」

谷間に叫び声が響く。

光牙は掴んだ糸を左手で引っ張った。

空いた右手を握りしめると、その掌は紫色の炎に包まれた。

『グウウウウツ?!』

その糸に手繰り寄せられる凶怪。

勢い良く引っ張られて、光牙の元へ吹き飛んだ。

「…今までの借りを利息付きで返してやるぜ!!凶怪!!」

糸に手繰り寄せられて吹き飛んでくる凶怪に、光牙の右腕が牙を剥く。

「破ッ!」

拳が、風を切った。

『ギギイッ！』

本能的に両腕を交差させて胸を守る凶怪。

「あつまあああああッ！」

しかし紫炎の拳はその腕をすり抜け、防御がから空きになっている腹に炸裂した。

『グギャギイイッ?!!』

再び吐血し、吹き飛んで川の浅瀬に転がる凶怪。

『ギ…ギイッ!』

水の抵抗で勢いを失った凶怪は、赤い瞳を激しく点滅させて立ち上がった。

『ギイイ……ガガッ！』

背中の足がだらんと垂れ下がり、瞳が点滅するテンポが遅くなっていく凶怪。

既に力の限界を示していた。

「すごい！今の動き…まるで自分の体じゃないみたいだ！」

飛鳥は自らの両腕を見つめて歓喜の声をあげた。紅の掌が小刻みに震える。

（私が半分アシストしているのだ、それぐらいは動けるさ）

「…なんだ…そうか」

大猿に言われ、飛鳥はうなだれた。

「まあいいや！トドメをさすぞ！」

（ああ、一気に決める）

飛鳥に言われ、大猿は同意した。

次の瞬間には、光牙は走り出していた。

「どりゃッ！！コウガーキック！」

光牙は凶怪に肉迫し、回し蹴りを繰り返した。

飛鳥にとっては、某仮面〇〇〇〇を意識したスタイルの蹴りであった。

『ギグギヤアイツ?!』

転がりながら吹き飛ばす凶怪、それは先の飛鳥のようであった。

（今だ人間！右手を上げるんだ！）

「あ ああ！」

指示通りに光牙が右腕を上げると、先の戦闘で地面に突き刺した錫杖が浮遊し、一瞬で手元に飛来した。

「…トドメは やっぱこれか！」

装甲の中で苦笑する飛鳥。

「よつと」

光牙が振り回した錫杖は銀色に装甲され、先端の輪に三つの三角結晶が装備された。

「凶怪！よくもさつきは散々いたぶってくれやがったな！」

光牙が錫杖を振り上げると、その先端は紅く燃える炎の刃を形成した。

『ギ…ギギッ！！コウガアアッ！！』

蠢く凶怪は全身の放出口から白く輝く糸を放出した。

『ギギッ！レサエキイイッ！』

放出された糸は光牙を全方位から迫り、うねりながら加速した。

（凶怪よ、その魂よ！闇へ帰れ！）

大猿の呪詛のような叫びが響く。

「いづくぜえええいッ！！」

それと同時に、光牙の覇気は迫り来る糸を圧倒し次々と蒸発させた。

「たあッ！！」

光牙は、跳躍した。

10メートルほどは飛んだであろうか。

その凄まじい脚力はまるで、飛蝗^{ハッタ}のようであった。

「斬滅ッ！！」

一閃。

落下しながら光牙の振り下ろした錫杖が、光牙に炸裂する。

『ギアイイイイイッ?!』

錫杖の先端の光の刃は凶怪を切り裂き、その斑尾模様の体を光の粒へと変換させた。

『……ギ……?!』

（今だ！）

光牙は左手で腰のアーマーから無地の御札を取り出して、手前に掲げた。

（凶怪！………回収！）

御札が光の粒となった凶怪を吸収すると、その表面に蜘蛛の模様が浮かび上がった。

「終わった……か……？」

腰のアーマーへと御札を戻す光牙。

この御札を使った一連の動作は、大猿のアシストであった。

（…まだ名前を聞いてなかったな、人間）

光牙のヘルメットが外れて飛鳥の目の前を浮遊し、そこから大猿の声が響いた。

相変わらず落ち着いた、低い声であった。

「俺……俺か？…俺の名は………飛鳥……」

頭が開放された飛鳥は空中に停滞しているヘルメットに向かって自己紹介した。

無論、飛鳥の体はまだ紅き光牙の鎧に包まれている。

「神代 飛鳥だ！」

親指で自らを指差す飛鳥は、不敵な笑みで浮遊するヘルメットを見つめた。

（……………そうか 神代 飛鳥か）

ヘルメットは、ふうむと唸り、頷いた。

心なしか、ふらふらとしているようにも見えた。

「…どうした？大猿？！」

ヘルメットを両手で掴み、飛鳥は詰め寄った。

(…すまん…飛鳥 君の体の傷を治すのに…力を使いすぎたようだ…)

「……………あ、そういえば 痛くねえや」

気づくのが遅い飛鳥。

体を包んでいた紅の鎧は一気に脱着されて浮遊し、ヘルメットと合体した。

「…って…どうしたんだよ！？大猿！」

鎧とヘルメットが合体すると、小さな鋼の猿に変質した。
先の巨大な大猿と同じ形状ではあったが、小さいため迫力は殆どない。

光沢があり、神秘的ではあったが。

(……………ひでぶ)

鋼の猿は瞳を閉じていた。

「…力を使い果たして…寝てんのか」

飛鳥は、はあつと息を吐いた。

様々なことが、一気に起こりすぎていた。

「大猿……………光牙…なにが なんなんやら」

周囲はまだ暗いが、飛鳥は瞳を閉じた。

「…ん？」

飛鳥の瞳の裏に、光が浮かぶ。

「先輩ッ！！」

花澄が、息をきらして駆けてきた。

飛鳥が囿になっているのに気づいたのであろう、その顔には絶望さえ浮かんでいた。

「無事だったんですか?!」

花澄が手に持っていたライトが飛鳥を照らす。

そのシルエットを見つけた花澄は、瞳を見開いた。

「せんぱ……………???!」

思わず、花澄は言葉を無くし、手に持っていたライトを落とした。

「大丈夫だ!花澄!凶怪は俺が倒したぜ!」

右手でグットサインを出す飛鳥、ただ

鎧を脱着した飛鳥は、素っ裸であった。

「…あ」

【次回予告】

覚醒した戦士を帰すまいと、新たな凶怪が牙を剥く。

「だめです先輩!携帯も包囲磁針も狂ってます!」

緑の木々が、迷路となりて二人の前に迫る。

「くっ!どこだ!どこから攻撃しやがった?!」

見えない敵に、どうやって立ち向かう?

(擬態能力を持つ凶怪…奴らは本格的に動き出したと言ったことか…)

【巻之二 深緑の、恐怖】

木を隠すなら、森の中。

第五部 戦う、漢（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

また、次回の更新は約1ヶ月後になります。

これからもよろしく願います。

卷之二 深緑の、恐怖。（前書き）

第一部 黄金色の、雷

巻之二 深緑の、恐怖。

朝焼けに輝く岩を足場にして、その男は傾斜を走った。

「……………なんだ…この感覚は…」

ここは浅間山。

群馬県嬬恋村と長野県軽井沢の境の辺りにある、未だにマグマが脈動する山である。

近頃、『新世紀エヴァンゲリオン』のアスカの駆るエ〇ア式号機が使徒と戦った場所である。

…ごめんなさい、もう十年前だった…

「…はあああ……………どう思う？」

男は深いため息を吐きながら乾いた風に揺れる銀色の髪を掻き、肩に乗っている黄金色の狐に語りかけた。

（……………そうね……………）

男は白色のジャンパーを羽織り、トレッキングシューズを履いていた。

その肩の黄金色の狐は瞳を見開いた。

（この感覚は……………光牙ね…意外と近くに、紅の波動を感じるわ……………）

鋼の狐は、緑色の瞳を細めて呟く。

その声は成熟した女性のように落ち着いており、淡々としていた。

「……………紅……………赤いのか…暑苦しいのは御免だぜ……………はああッ……………ん？」

彼は立ち止まって、ため息を吐きながら周囲を見回した。

「……………」

(……さすがにこの辺りは立入禁止区域だけに多いわね)
岩場の影から、数十体の斑尾模様の黒子くろこが現れた。

(…雑魚だけど ね…)

黄金色の狐は呆れたように呟くと、男の肩から降りて空中に浮遊した。

『…プギヤアアアッ!』

『ギギギッ …!』

『ヨギヨギヨイ!ガヌ!』

数十体の黒子の中から、おどろおどろしい瞳が描かれた覆面を被った黒子が現れて、叫んだ。

『……ギギ! ガダギダマ! コウガ!』

瞳が描かれたリーダー格の黒子が男を指差すと、周りを取り囲んでいた黒子がじわじわと迫ってきた。

『ギギギイッ …!』

「仕方ねえ……はああアッ!」

男は銀髪を風に靡かせて近くに接近した黒子に鉄拳を繰り出した。

『ぐギイ?』

黒子の顔面に鉄拳がめり込む。

「ハッ!」

吹き飛ぶ黒子を背に、背後にいた黒子に回し蹴りを繰り出す男。

(…相変わらず生身でも強いのねえ…燦直しなくてもいいかしら?)

鋼の狐は、浮遊しながらバリアーのような力場を展開して男の背後

から迫る黒子に突撃した。

「馬鹿言え」

男が呟くと、鋼の狐は意地悪そうな笑みを浮かべて光を放った。

（ふふ…行くわよ…！）

鋼の狐が男の足下に駆け寄ると、その周囲に雷が降り注いだ。

「…はあああ…」

男が一際深い溜め息を吐き出すと、その銀色の髪は雷と共に吹きさらば風に靡いて逆立った。

「……………燦 直！」

男が天を指差して叫ぶ。（……………！！）

その叫びに反応して鋼の狐は人と同じサイズに変化して、黄金色の鎧となつて男の全身に装着された。

「百射…管音！」

怒髪のような頭の黄金色の戦士が腰の後ろから取り出した百射管音ひゃくいかんおんと呼ばれる武器は、束の部分に六つの穴が空いた真っ直ぐな刀身をもった剣であつた。

（…ギギッ！コウガアアアッ！！！）

リーダー格の黒子は一際巨大な岩の上に立って叫ぶと、その黒い服はドロドロと溶け出した…

『ロジゴグガッ……………コウガアッ！』

溶けた黒い服の中から百足むかでのような無数の足をもった黄色い斑尾模様の凶怪が現れ、傾斜を下つて黄金色の戦士に近接した。

「……………はああああ……………はあアッ！！！」

男の深い溜め息が叫びとなる。

朝焼けを背に、黄金色の戦士が躍動する。

闇を払うように、百射管音が舞った。

…その頃…

「…おお……着替え持ってきて正解だったな」

全裸の飛鳥は、道路脇に駐車しておいた車の中で着替えていた。
（君の傷口を塞ぐために使ってしまった…すまない）
手のひらサイズに変化した鋼の猿が後部座席で呟くと、飛鳥は笑った。

「まあ、血だらけよかマシだろ　気にすんなや……………っと」

因みに、光使の活動の為であるから違法駐車では無い。

「……………」

Tシャツを着た飛鳥は、先ほどまでクーラーボックスに入っていた
ドクターペッパーを飲んだ。

「ぷはあ……………」

ジュースの原液のような独特の濃い味と、冷えた喉越しが頭を刺激する。

ルーズな飛鳥はこの一杯で、今日も1日頑張ろうと思えるのだった。

「…はあつ……先輩が変身ヒーローに……そんな…ありえない」
車の外で溜め息をつく花澄。

どうやら話は飛鳥から全て聞いたようであった。

「先輩が変身できるようになったなんて…どう幹部の人に連絡すればいいんだろ……………」

手元の腕時計を見つめる花澄。

すでに6時30分になっていた。

「…はああっ…」

光使の決まりでは、朝の8時には日本各地の光使の支部へと連絡しなければならぬ。それは遭難者や、大きな被害への対策であった。そして通常ならばその後凶怪探索や地域の安全活動をするのだが…今の状況では…そうにも行きそうになかった

「…ん…霧…？」

峠の周囲に白い霧が現れ、太陽の光は薄くなった。

花澄は、不安な気持ちに駆られた。

「花澄も飲むかー？」

運転席側のドアが空き、ジンジャエールを握った腕がひょっこりとかから出てきた。

「…はあい………」

花澄の受難は、飛鳥の戦いと共に続きそうであった。

今回の話は、そんなブルーな朝から始まる。

巻之二 深緑の、恐怖。（後書き）

次回こそ本当に1ヶ月後になってしまうかもです、すみませんでした。

ご意見ご感想、質問 e t c をお待ちしております

第二部 下る、二人（前書き）

車は走る、男を乗せて。

車は走る、精霊を乗せて。

第二部 下る、二人

ワゴン車が峠の坂道を下っていく。

くねった山道の脇には木々が生い茂っており、そこは緑色の世界であつた。

「……………」

花澄はワゴン車の運転席で、怪訝な顔をしながら運転をしていた。

花澄が操作しているワゴン車は光使が所有する特別性のもので対弾・耐熱ガラスが装備されており、主に遠出に使われている。

「先輩！なんで連絡がつかないんですか？！」

花澄はフロントミラー越しに後部座席の飛鳥を見つめた。

「……うゝむ……………」

飛鳥は唸りながら、携帯を操作した。

少し古びた携帯画面の左上には『圏外』とだけ表示されており、飛鳥はうなだれた。

「だめだ花澄！圏外だ！」

飛鳥は携帯を閉じて座席にもたれかかった。

「えゝッ？！」

花澄は振り向き、飛鳥の携帯を見つめる。

当然、前は見えていない。

「ばっバカチン！前見る！前！」

「はッ！はいっ！」

飛鳥は焦って叫ぶ、峠の脇見運転は危険である。

峠での事故はガードレールをぶち破る。

ガードレールをぶち破った車は下へと落下し、車体は潰される。当然、即死の可能性も高い。

よい子は真似しないでほしい。

よい子は車を運転しないか…

「なんで山奥でも繋がる光使の携帯が圏外になってるんですか？」

飛鳥は頭を掻きながら、携帯の画面を見つめた。

「とりあえずこの峠を下って…電話の繋がる場所に行くしかないだろ…… 運転、よろしく頼むぜ花澄」

「はい………」

花澄の返事を聞いた飛鳥は携帯をポケットに入れると、シートを下げ、瞳を閉じた。

「……………」

瞳を閉じた飛鳥は微動だにしなくなった。

眠ってしまった。

朝っぱらから。

さっきのドクターペッパーはどうしたんだ！

「…はあ………」

ツツコムを抑えた花澄は仕方ないといった表情で頷き、車を走らせた。

「大猿さん、もう一回説明してただけませんか？先輩が変身したっていう… 光牙について」

運転手の気分とは裏腹にワゴン車は軽快に峠を走り、花澄の視界の横で緑の景色は流れていく。

「僕と先輩は光使です、凶怪と光使の歴史は光使に入った時に聞きました…でも…光牙については…聞かされていません」

花澄は真面目な表情のままフロントミラー越しに後部座席の大猿を見つめた。

「……………」

飛鳥の横のシートに座禅を組んで座っていた大猿は瞳を閉じて口を開いた。

「君が飛鳥のサポート役ならば理解する必要があるな…我々、精霊について…」

大猿はフロントミラー越しに花澄を見つめた。
飛鳥が命をかけて守ろうとした仲間ならば、話す価値はあると思った。

「そして…光牙について……」

花澄は瞳を細め、ハンドルを握る掌に力を込めた。

第二部 下る、二人（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

第三部 蠶く、大木（前書き）

蠶く大木を前に、光牙が燦上する。

第三部 蠢く、大木

自然の生命を依代として活動し、人を襲う闇の一族である凶怪は、戦闘組織【光使】との戦いによって一度は封印され、現在に至っている。

「凶怪というのは生き物に寄生する精神生命体のようなもの…それは光使の人間ならば知っていますよ」

花澄の比喻は正しかった。

「そうか」

一族と言うより、凶怪は精神生命体の集団に近い存在である。

「でも精霊や光牙なんてものは…僕達は知らされていませんよ」

「…光使が使う大自然の力…それが具現化したものが我々…精霊だ」
精霊の力は自然の生命を凶怪から解放することができる、その力を纏った戦士が光の牙、光牙である。

「光使の代表や幹部クラスの人間ならば精霊や光牙を知っているはずだ、でなければ君達が昨晚使ったような自然の力を利用した武器を作れるわけがない」

大猿は瞳を細めた。

「…そうだったのか…大猿！」

大猿の横の座席で惰眠を貪っていたはずの飛鳥がすつくと起き上がり、大猿を見つめた。

「ああ、やはり一度、光使の代表と会わなければいけないようだな」

大猿は、飛鳥を見つめた。

「ああ！わかったぜ！じゃあ行け行け花澄！80キロくらい吹っ飛ばせ！」

「……はあ……」

後部座席の声を聞き、花澄は不安に駆られながらも苦笑いをした。

「あれ………？」

花澄は車のスピードを落として、車のライトをつけた。

「どうした花澄？！」

スピードの変化に気づいた飛鳥が車の外を見つめると、外の景色がぼやけているようにも見えた。

「なんだこりゃ？！」

「濃霧でしょうか……とりあえずスピードを落としました……」

ワゴン車がカーブを曲がろうとした瞬間、その車体の前の道路を何か太い鞭のようなものが遮った。

「いや違う……！これは凶怪だ！」

「なっ！？うそっ……！」

慌てて急ブレーキを踏む花澄。ワゴン車は失速しながらもその太い鞭のようなものに衝突し、フロント部分が大破した。

「……いつっ……」

「これは……木の幹か？！」

飛鳥は後部座席から飛び出し、のたうち回る木の幹を凝視した。

『……シュコー……シュコー…… シュコー 』

太い鞭のようなものは茶色く斑尾模様があり、幾重にも枝が飛び出

している先には緑色の鋭い葉が着いていた。

「…いや…違う…この幹自体が、凶怪の依代なのだ！」

飛鳥の足元で大猿は叫ぶ。

しかし、彼らの前の凶怪は、木のもようであった。

「先輩！」

花澄は助手席に置いてあったバックを掴み、運転席から飛び出た。

「大丈夫だ花澄！いくぞ大猿！」

「ああ！」

奇怪な音を発しながら道の脇の木々の中から這い出てくる幹を前に、飛鳥と大猿は走り出した。

「燦直！」

飛鳥が跳躍すると、大猿は光の鎧となってその体に装着された。

「「精霊装甲！光牙！！」

」

飛鳥と大猿の声は重なり合い、飛鳥は紅い装甲の戦士・光牙へと姿を変えた。

『…シュコー！』

光使である神代飛鳥が精霊・赤岩の大猿を燦直する時間は、わずか0、05秒にすぎない。

では、その燦直プロセスを再び見てみよう。

「燦」

この言葉によって、人と同じサイズとなった大猿の四肢が分裂し、烈火の如き輝きを放つ鎧と化す。

「直！」

鎧と化した大猿はこの言葉により飛鳥の体に装着され、木・火・土・金・水…五つのエネルギーを大自然から収束させる。
燦直。

この二つのプロセスにより、光牙が燦上するのだ！

「コウガーッ！キーク！」

光牙となった飛鳥は跳躍したまま落下し、大木に飛び蹴りが炸裂する。

第三部 盡く、大木（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

第四部 翻弄する、木々（前書き）

第四部 翻弄する、木々

第四部 翻弄する、木々

「コウガー！キーク！」

光牙の一撃が炸裂すると、凶怪の太い体は思い切り吹き飛び、峠の斜面に衝突した。

「……シュコー……！」

大木凶怪が唸ると、体の表面が泡のように弾けて人型に変質した。

「効いたのか！？」

「今のダメージで真っ向から戦うのは不利だと感じたらしい」
続いて放った光牙の鉄拳が風を切る。

「今の凶怪はスピード重視の形態だ」

大木凶怪は横転をしながらガードレールを飛び越え、霧で視界の悪い峠の下へと転がっていった。

「追うぞ、飛鳥」

「ああ！」

霧が立ち込めるガードレールへ足をかけた光牙を、その戦いを見ていた少年が呼び止めた。

「先輩！これッ！」

花澄は独鈷を放り投げた。

「サンキュ、行ってくるわ」

光牙が独鈷を受け取ると、その独鈷は光に包まれて変質を始めた。

「結晶独鈷・照角」

独鈷の両方の先端はクリスタル状の物質と化し、柄の部分はざらつ

いた金属のような材質に変化した。

光牙は手にした武具を、対凶怪攻撃用の【光の武具】へと変質させる能力を備えている。

光牙は変質した独鈷を構えた。

「せいやッ！」

光牙は峠の下へと飛び降りる。

その光景を静かに見つめていた花澄の体の中に溜まっていた溜め息が出た。

「すごいなあ…あれが光牙か 先輩、ガンバレ！」

小声でエールを送る花澄。

その光景を見つめていた…小さな蜂。

その瞳は紅く輝いた。

……

霧が立ち込める木々の間に着地した光牙。

「なっ?!」

しかし、その瞬間に四方からの木々の攻撃を受け、転倒した。

「やばいぞ飛鳥…私達はどうかやら凶怪の最有力攻撃範囲内に入ってしまったようだ」

光牙は頭をさすりながら起き上がる。

「なに?!…がああッ！」

驚く光牙の背中に木の葉が突き刺さる。

「くっ！」

光牙の背中の装甲は蠢き、先端が刃物のように鋭く尖っている木の葉を排出した。

『…シュコー……！』

光牙をあざ笑うかのように、木々はざわめく。

「全方位に注意するんだ！ 大木凶怪の能力は…」

風に揺られてか、それとも凶怪の意志か、緑の木の葉が舞い散った。

「周囲に擬態するその形そのものだ！」

独鈷を振り回して木の葉を弾き飛ばす光牙。

「なんだって?!」

山吹色の光を放つ独鈷は迫り来る木の葉を完全に弾いていた…しかし

「くっ?! 攻撃できねえ!」

光牙の胸に、腹に、鋭い木の葉が突き刺さる。

『……………!』

霧が立ち込める深緑の木々の間で、静かに潜む大木凶怪の紅い瞳が輝いた。

「でえいッ!」

光牙は独鈷を握りしめて木々にを仕掛けるが、その全てがただの大木に当たっていた。

「くっ! どうすりゃいいんだ! どれが凶怪なんだ!」

焦る飛鳥。

突き刺さる木の葉により光牙の足元はだんだんとふらつき、攻撃の振りが大雑把になっていく。

「…やむを得ないか」

ふらついていた足が、確実に大地を踏みしめる。

大猿のアシストにより、光牙は正常な動きを取り戻した。

「飛鳥…あれを使う時が来たようだ！」

装甲と化している大猿は静かに呟いた。

「なっ！なにをッ？！」

その声に反応するかのように、光牙の左腕の側面の装甲の一部がスライドし、発光した。

第四部 翻弄する、木々（後書き）

ご意見ご感想、お待ちしております。おリマスオさん。

第五部 蜘蛛と、独鈷

「飛鳥… あれを使う時が来たようだ！」

その声に反応するかのように、光牙の左腕の側面の装甲の一部がスライドし、発光した。

「光牙には、封印した凶怪を再び光の使役として実体化することのできる能力があるのだ」

スライドした装甲と左腕の間にセットされていた灰色の御札が射出され、風を裂いてと大地に刺さった。

「難しい言葉使うなよ！ しかも紙かよッ！」

別に難しい言葉ではないが、今の混乱した飛鳥には充分難解であった。

「現れよ！使役！」

大猿の叫びと共に御札は周囲から自然のエネルギーを収集し、山吹色に発光した。

『ギギ！』

光牙の横の山吹色の光が実体化を始めたのは、六つの瞳をもった異形の蜘蛛人間… 蜘蛛くものしゃくの使役であつた。

「なっ！なんじゃこりゃああっ！？」

蜘蛛の使役は実体化し、ふるふると首を振った。
驚愕する飛鳥に、大猿は叫んだ。

「封印した蜘蛛凶怪の情報から作り上げた蜘蛛の使役だ、光牙の意志と命令で動く！」

飛鳥は戸惑いながらも、蜘蛛光怪を見つめた。

「そ　そうなのか!？」

木の葉を刺さり続ける光牙は左腕を振り上げた。

「なら！　いけッ！蜘蛛の使役！」

光牙の叫びに呼応するかのように、蜘蛛の使役の瞳が緑色に発光する。

『ギギッ!』

蜘蛛の使役は背中から生えている全ての腕を広げて、その先端から全方向へ蜘蛛の糸を放射した。

『シュコー!？』

蜘蛛の糸は弾丸のようなスピードで木々の間に付着し、巨大な六角形の巣を形成した。

「炙り出せッ！」

『ギギギッ!』

蜘蛛の使役が口を開いて更に糸を放射する。

その糸はまるでクラッカーのように拡散し、ついにその大木を捕らえた。

『シュコー!』

足に糸が絡まって転倒した大木凶怪。

『ギギッ!』

大木凶怪は蜘蛛の使役にそのまま一気に引き寄せられて吹っ飛んだ。

「今だ！飛鳥！」

「ああ！」

光牙は蜘蛛の使役の真横で独鈷を構えて大地を踏みしめる。すると、光牙の瞳は発光し、独鈷が赤く輝いた。

「突滅！」

光牙は吹っ飛んでくる大木凶怪に向かって、独鈷を投擲した。

『シュコー…！！』

投擲された独鈷は一筋の流星のように加速し、大木凶怪の体を貫通した。

「凶怪…回収！」

光の粒へと変化していく凶怪に向け、右腕から御札を射出した。

「…これで大木凶怪も使えるってことか…まるでポケオンみたいだな」

光を吸収した御札は光牙の右腕の掌の中へと飛び、光牙はそのまま左腕の装甲へと入れた。

「…ポケモンってなんだ…？」

装甲を解除した飛鳥は苦笑しながら木に突き刺さった独鈷を引き抜

いた。

「…先輩…大丈夫かなあ」

ガードレールに寄りかかり、ガード下を覗き込む花澄。

「まあ、先輩のことだから 普通に大丈夫だろうけど…」

その下は断崖絶壁までとはいかないものの、かなり急な斜面になっていた。

「よし、じゃあ僕は昼食の準備をしよう…」

『ビーツ!』

車に戻ろうと花澄が振り返った瞬間、何者かの腕が花澄を突き飛ばす。

「あああつ!?!」

花澄の体はガードレールを越えて、峠の斜面へと投げ出された。

【次回予告】

花澄に突然訪れる危機。

そして突然二人の前に現れた新たな戦士。

風車を片手に敵を斬る、斬る、斬る!

「なんだ…このおじさんは!」

七三分けの黒髪をなびかせ、そのおじさんは燦直する！

「お前達の使命は凶怪を再び封印することだ…頼んだぞ 飛鳥、花澄」

そして榛名湖に伝わる伝説の秘密が、ついに明かされる。

【巻之三 榛名湖の、秘密】

燦直せよ、光牙。

第五部 蜘蛛と、独鈷（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしておりマンモス。

巻之三 榛名湖の、秘密（前書き）

光牙の舞台は主に群馬県である。

この作品は群馬県を知る人にとっては頷ける、知らない人にとっては行きたくなるような作品になる。
といいな。

巻之三 榛名湖の、秘密

車に戻ろうと花澄が振り返った瞬間、何者かの腕が花澄を突き飛ばす。

「あああっ!?!」

花澄の体はガードレールを越えて、峠の斜面へと投げ出された。

「遅かったか!」

その場に駆けつけたのは、七三分けの黒髪に真っ直ぐな瞳をもった中年男性であった。

「…いくぞ…!」

中年男性の肩に掴まっていた手のひらサイズの鋼の鷲が瞳を細めて、飛び立った。

「ああ、やるしか…ないようだ!」

中年男性は花澄が落下したガードレールを飛び越えて跳躍した。

「光牙っ!」

落下をしながら、叫びと共に両腕の人差し指に填められていたリングが輝き、男性はそれを重ね合わせた。

「燦直!」

光に包まれた男性は深い空のように蒼い装甲のに包まれて光牙となり、落下を続けた。

「ていつ!」

蒼い光牙は傾斜を走り、一気に駆け下りた。

「ああああっ！！」

悲鳴をあげ続ける花澄、既に気を失う寸前であった。

「もう大丈夫だ！」

蒼い光牙は落下寸前の花澄を抱き止め、大地に着地した。
「つと」

大地を踏みしめて、蒼い光牙は木々の向こうを見つめた。

「あつ！…ありがとうございます！…っていつか…あなたは誰！？」

花澄は瞳を大きく見開き、蒼い装甲の戦士を見つめた。

「後で説明する、光使登録番号七十六番、紫陽花澄くん」

蒼い装甲の戦士が花澄を背にして右腕を挙げる。

「なぜ…僕の名を？」

その右腕の掌に大自然の光が収束した。

「精霊風車・空風ッ！」

掌の光の中から草取り鎌に近いサイズの鋼の風車…からかせ空風が現れ、蒼い装甲の戦士は一気にその風車を投擲した。

『ビーツ?!』

投げつけられた風車は木々の間を光のようにすり抜け、それに突き刺さった。

『タバレク!ビーツ!!』

風車が突き刺さったのは、蜂を依代にした凶怪 蜂凶怪であった。
蜂凶怪は右腕の蜂の尾を振り上げて、木々の向こうの光牙に向かって走り出した。

「時間が無い！倒すぞ！」

蒼い装甲と化した大鷲が叫ぶ。

「ああ！」

蒼い光牙は跳躍して大木の木の枝に立ち、再び落下した。

「光牙・高速風車蹴り！」

蒼い光牙は高速前転をしながら落下し、光が収束したかかと落としを繰り出した。

『ビビッ?!』

かかと落としは蜂凶怪の肩に炸裂する、

「っ！」

蒼い光牙は体勢を立て直すと蜂凶怪の胸から精霊風車を引き抜いた。

「蒼天！空つ風斬り！」

蒼い光牙はそのまま精霊風車を握り、起き上がる蜂凶怪を引き裂いた。

『ビビビッビーツ?!』

蜂凶怪はそのまま光の粒に変わっていく。

「回収する」

体勢を立て直した蒼い光牙の左腕の装甲がスライドし、その隙間から御札が射出された。

「…こつちにいたんだな花澄！その…蒼い光牙ってのは！」

木々の間を走り抜ける二人。

先頭の花澄が指差す方向へと一直線に走っていく。

「はい！確かこっちの方向でした！」

駆けつけた二人の前に現れたのは、蒼い装甲を解除して、頭と白いコートを着た中年男性であつた。

「待っていたぞ、紫陽花澄、神代飛鳥」

男は腕を腰の後ろに回し、瞳を細めた。

「なっ?!」

「…まさか…あなたが…!？」

その男の姿を見るなり、二人は驚愕した。

なぜなのかは、まだ秘密である。

卷之三 榛名湖の、秘密（後書き）

おじさんの正体とは一体…

最終部 果てしなき戦いが、始まる。（前書き）

第二部 彼は、明日虎。

最終部 果てしなき戦いが、始まる。

二人はその中年の男性の姿を見て驚いた。
その男の正体とは…

「あなたは… 光使関東全面支部長の方 でしたよね ？」

花澄の言うとおりである。

蒼い光牙に燦直したこの男こそ、関東の光使の全てを取り仕切る支部長であつた。

「なんでこんな真夏にコートなんか着てるんだ？」

飛鳥の驚きとは、ただただこの中年の男性のファッションのことであつた。

この暑い真夏に、コートを着ているのは、確におかしいが。

「あなたが… 関東の光使を取り仕切る者か… 五十五… 六十歳といった所か 」

大猿は飛鳥の肩から降りて、大地に降り立った。

「飛鳥、花澄、大猿、その通りだ… 私こそ関東の光使の動きを決める幹部…」

男性が右腕を挙げると、その手のひらに急降下してきたてのひらサイズの鋼の鷹が着陸した。

「そしてこの真夏にコートを着る六十二歳の変なおっさん…… 清水 明日虎だ」

綱の鷹は両方の翼を丸めて輪を作り、おっさん…もとい 清水明日虎しみずあすのブレスレットへと変わった。

そして、明日虎は少し眉をひそめた。

「ああっ…そうだったのか…っ！ええ！！」

驚く飛鳥を見てため息を吐く明日虎。

「やはり君を飛鳥につけておいて正解だったようだな、花澄 これからもよろしく頼むぞ」

明日虎は視線を飛鳥の右どなりの花澄に変えて、静かに瞳を細めた。

「は……はあ」

呆然とする花澄。

「…ちょ ちょっと待って下さいよ支部長！ これからって…これからどう動けばいいんですか？！」

戸惑いを隠せない飛鳥、それは人知を超越した力を得たためであった。

「確かに私も困っている、光使の通常任務よりも 強い凶怪を倒すことが先決だと思うが」

大猿は訝しげな表情のまま呟いた。

その視線を感じた明日虎は、静かに頷いた。

「その通りだよ大猿、私と飛鳥のように光牙に燦直できるようになった人間は、光使の任務よりも危険な任務をしなければならない」

明日虎は自らの腕のブレスレットとリングを見つめた。

「（…やはり 私以外の精霊達も復活しているようだな……だがこれは）」

大猿も、そのブレスレットとリングを見つめた。

もう何年も使っているような使用感があり、所々に小さな傷があった。

「だから飛鳥、君は戦ってくれ、二人の危険手当は出す、保険も増やす、悪くない条件だろう？」

光使の任務は危険度により手当が増える、完全にボランティアではなくて仕事か副業でやっている人が多いのが、この組織の特徴でもあった。

「ま…まあ、俺は守るために力を使いたいからいいが…お前はいいのか？花澄？」

「え…まあ いいですけど」

決意を新たにする飛鳥と戸惑う花澄を前にして、明日虎は静かに崖の上…峠の上を指差した…

「ならば最初の任務だ…榛名湖にいらつて言われている伝説にもなつた大蛇の凶怪を倒してくれ」

それだけ言つと、明日虎は歩き出し二人の間を通り過ぎた。

「…榛名湖の…大蛇」

飛鳥は峠を見上げた。

この峠の向こう側は、榛名湖である。
無理なく行けると思った。

「私もこの周辺の凶怪を倒したら急行する、頼んだぞ」

静かに森の中に入っていく明日虎を背に、二人は決意を新たに歩き出した。

「行つて…しまったな…」

「…やって…やるか！」

「…はい……！」

その森の中で輝いた蒼い光を一瞬だけ見つめて、飛鳥と花澄はその場を後にした。

―風が吹く、空っ風が―

光牙の戦いはこれからである、この戦いに勝つのは光か闇か。

それは… この風が知っているのかもしれない…

最終部 果てしなき戦いが、始まる。（後書き）

明日虎……まんまアレな名前です…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9312a/>

- 精霊装甲 光牙 -

2010年10月9日23時45分発行